

テュービンゲン大学の京都留学制度とその支援プログラム

濱田朱美・小山洋子 Hamada, Akemi u. Koyama-Siebert, Yôko

(テュービンゲン大学 アジア地域文化研究所 日本学科
Universität Tübingen, Asien-Orient-Institut, Abteilung Japanologie)

要旨/Zusammenfassung

テュービンゲン大学日本学科は、17年前から「テュービンゲン大学同志社日本語センター」を京都の同志社大学キャンパス内に持ち、BA課程の一環として学生を短期留学に送っている。ここでは、まず、ドイツ唯一のこの留学制度の概要を述べ、次に、それを効果的にするために留学前にどんな準備をしているか、そして、それに対する留学中の学生のフィードバック（2008年度）、さらに、留学後には反省・仕上げとして何をしているかを報告し、今後の課題を述べる¹。

Die Japanologie der Universität Tübingen unterhält auf dem Campus der Doshisha-Universität in Kyoto seit ca. 17 Jahren das „Tübinger Zentrum für Japanische Sprache“, an dem die Studierenden im Rahmen ihres BA-Studiums ein vollständig integriertes Auslandssemester absolvieren.

In dem vorliegenden Beitrag soll das Auslandssemester inhaltlich und hinsichtlich seiner Bedeutung im Gesamtstudium dargestellt werden. Dabei werden der Stand der Vorbereitung, wie er aus Veranstaltungen vor dem Auslandsaufenthalt ersichtlich ist, das Feedback der Studierenden aus einer im Jahr 2008 durchgeführten Umfrage und die Nacharbeitungsmaßnahme nach der Rückkehr nach Tübingen vorgestellt und es wird auf zukünftige Entwicklungen eingegangen.

1 テュービンゲン大学日本学科の京都留学制度について

1.1 「テュービンゲン大学同志社日本語センター」と日本学科における意味

テュービンゲン大学アジア地域研究所日本学科は、1993年10月より京都の同志社大学キャンパス内に「テュービンゲン

1 この稿は2008年3月にエアランゲン大学で開催された第14回ドイツ語圏日本語教育研究会シンポジウムで発表した内容をもとに、2010年現在の実情を考慮し若干修正をほどこしたものである。

大学同志社日本語センター」を運営している。このセンターはチュービンゲン大学日本学科の付属施設としてあり、日本人スタッフの給与を含め経費はその予算でまかなわれる。その一方で、このセンターは同志社大学より提供される様々なサービスの恩恵に預かっている。まず、京都の中心部、御所北隣に位置する今出川キャンパス内に事務所・専用教室など「場」が無償提供され、また、同志社大学（学長）はチュービンゲン大学生の日本滞在中の法的保証人となり、さらに、チュービンゲン大学生に「特別学生」として様々な権利（図書館や学食など大学施設の利用、サークル活動への参加など²)を与える³。同志社大学は当時すでに、アメリカの名門私学 15 大学からなる AKP (Associated Kyoto Program) にキャンパスを提供しており、チュービンゲン大学のセンターは同じ棟に開設された。

これは日本における最初のドイツの大学の付属施設であったが、17 周年を迎える今もドイツ唯一のものである⁴。17 年の活動を通し、このセンターを持つことは、チュービンゲン大学日本学科の大きな特色として、ますます大きな意味を持つようになってきた。それに平行して、当学科のカリキュラム (BA 課程) も、この留学を核として考え、それを生かすように変えられてきた。当学科にとっては、京都のセンターはなくてはならないものになっているのである。

センターはチュービンゲン大学日本学科から派遣される所長一名と現地スタッフで運営される。それは、事務一名（専任）、日本語教員（非常勤）四名、ホームステイ・コーディネーター（非常勤）一名である。受け入れ学生の最大数は約 24 名で、語学授業はそのほとんどがニグループに分けて行われ、学生は週 14 時間の語学授業（文法 4 時間、読解 2 時間、会話 2 時間、聴解 2 時間、漢字・語彙 2 時間、作文 2 時間）を受ける。これに、ゼミナール（4 時間）と文化見学プロゲ

2 学割定期券の利用も大きな特典だったが、これは JR 西日本が規則を変えて、非正規生の外国人留学生を「割引乗車券」「通学定期」の発売対象からはずしたため、その意味が減った。

3 同志社大学の正規の授業に出る権利は認められていない。担当教授が個人的に認めた場合に限り、例外的に出ることはできるが、単位は取れない。

4 日本学科に続き、2001 年にはチュービンゲン大学中国学科でも同様の付属施設が北京に作られ (The European Centre for Chinese Studies at Peking University (ECCS); コペンハーゲン大学、北京大学との協同事業)、また 2010 年には韓国学で、Tuebingen Center for Korean Studies at Korea University (TUCKU) の協定が結ばれた。

ラムが加わる。ホームステイ・コーディネーターがいるのは、学生の基本的な宿泊形態がホームステイであるからだ。アパート利用は、学生の個人的事情により例外的に認められる。

1.2 留学制度と BA 課程

このセンターは開設以来同じパターンで利用されてきたが、今後少し変わる。今までは、年に二つある学期のうち、一つを日本学専攻の学生が日本留学先として利用し、もう一つを日本学専攻以外の大卒者対象「一年制大学院—日本文化・異文化間コミュニケーション専攻」課程の学生が、その後半を占める日本留学プログラムに利用してきた⁵。しかし、後者の課程が 2010/11 年度をもって終了することになり、今後は日本学専攻の学生 (BA 課程) のみが利用していくことになった。

この留学はチュービンゲン大学日本学の BA 課程の一環なので、留学中の取得単位はすべて認められる。京都留学が自主的な一つの選択肢として位置づけられていた間は、京都の取得単位には職業技能単位 (BQ Modul = Berufsqualifizierende Modul) という必修選択単位が当てられた。

ところで、インターネットの普及に伴って大学事情の情報収集がたやすくなったためか、近年チュービンゲン大学日本学科に入ってくる学生のほとんどが、この京都留学を志望の第一理由に挙げるようになった。こうした傾向を背景に、2006/07 年度にスタートした新 BA 課程⁶から、半年の京都留学が必修化された (単位の一部が必修単位、残りが職業技能単位である)。それで、チュービンゲン大学の日本学主専攻 BA 課程に応募する際には、この留学予定を承諾することがこの年から応募条件の一つになった。2010/11 年度にスタートした修正新 BA 課程においては、この「義務」的性格は軽減された。それは、留学の時期が「三学期目または四学期目」(希望により「三学期目と四学期目」も可) になり、そのため、チュービンゲンと京都で平行して同じモジュールの授業が行われることになったからだ。これで、何らかのやむをえない事情で留学できなくなった場合も、必要単位は取得できるようになった。

5 例えば、Universität Heidelberg (Japanologie)、Exportakademie Baden-Württemberg, Reutlingen, Hochschule Bremen (Fachbereich Wirtschaft) など。

6 この新 B.A. 課程導入と同時にマギスター課程は廃止になり、その入学が打ち切られた。

さて、この留学の必修化は当校の BA 課程に少なからずの影響を与えた。例えば、これでテュービンゲン大学日本学専攻の数年来の現実問題、「ふたを開けてみないと分からない」という無制限の入学状況にピリオドが打たれたことが挙げられる。それは、京都留学には 24 人という人数制限があるので、全員にその留学を保証するには一学年 24 人という「定員」を設けなければならない、その結果、書類選考と面接によって選抜された 30 人余に入学許可を出すことになったからだ⁷。これで人数は一定の枠内に留まることになり、語学授業において大きな意味を持つことになる。

一方、問題は、この必修化により入学者を経済的要因でふるいにかけることになってしまった点である。目下、制度としての奨学金は提供されていないからだ。ただ、だれしも奨学金を得る可能性はあると言え、今、学生が利用しているのは、以下の奨学金である。

- 1) 「連邦教育支援法」に基づく留学奨学金 (Auslands-Bafög)
- 2) DAAD-短期留学奨学金
- 3) バーデン・ヴュルテンベルク州基金奨学金。
- 4) バーデン・ヴュルテンベルク州海外留学旅費援助。旅費の最大 30% の補助が出る。
- 5) 「一年制大学院」の学生には、もう十余年以來アルフリード・クルップ・フォン・ボーレン＝ハルバッハ財団より京都留学のために一人につき一学期約 7.000 € の奨学金が給付されている (2010/11 年度で終了)。

さて、奨学金まで「お膳立て」して学生が自分で何もせずに留学するのと、現在のように、可能性を提示はするが学生各自が努力すべきであるのと、どちらがいいかは意見の分かれるところであろう。現状の不備を承知の上で後者の利点を挙げるとすれば、学生は自ら留学費用を何らかの形で用意しなければならないので、彼らの留学にかかる思いが真剣だという点である。これは学習者の高いモチベーションを意味し、効果的な学習の一番の前提でもある。

しかし、基本的には、経済的な理由から学生が当学科を敬遠することにならないように、場合に依じて留学援助ができるような態勢を作っていくことが必要である。

⁷ 入学後専攻を変えたり、一、二学期中に落第したりする者も必ず数人いるので、多少多めに採るのである。

1.3 留学への期待

では、日本学科の課程の中で、京都留学に何が期待されているだろうか。それは、まず次の三点だろう。

- 1) 語学研修、特に、三・四学期の学習内容として中級レベルの日本語を獲得していくことと日常会話の訓練（常体・敬体）
- 2) 異文化間コミュニケーション訓練
- 3) 日本社会・文化の実体験を通しての日本理解の深まり
- 4) （さらに、総合して）広い意味で各個人の人格的な成長

これらは日本学を専攻する者にとっては、すべてその専攻の目標に直結しているものであり、この点で教員側の期待と学生のそれとは共通している。しかし、各学生がそのどこに重点を置くかには個人差がある。

京都留学では、学生は次の三つの世界で日本と日本語に接するチャンスがある。

- a) 大学での授業。それは学生の顔ぶれこそドイツにいた時と同じだが、十人程度の小クラス制で、母語の通じない日本人教師によって直説法で行われる。
- b) ホームステイをする日本人家庭の中での日常。ほとんどの家庭で、家族との会話は媒介語は日本語だけであることが多い。
- c) 同志社大学のサークル活動やタンデム・プログラムへの参加を通して、自由時間に同世代や同好の者をつながる世界。

こうしたさまざまな日本を体験できることは、上記の目標に近づくための好条件であるはずだ。ただ、一学期といっても三～四ヶ月のことなので、あまり過大な期待をよせるわけにはいかない。それだからこそ、その効果を最大限にするために、その前にそれなりの準備が必要になってくる。

2 留学前のサポート⁸

2.1 日本語に関する留学前のサポート（語学教員による授業）

チュービンゲン大学日本学科の学生が京都へ留学する前の学期に行われる三学期目の会話の授業では、留学を視野に入れ以下のような授業内容にしている。

8 ここで紹介している授業の範囲でのサポートの他に、留学手続きに関するオリエンテーションも行っている。

- 1) テーマの準備としてのスピーチ
学生の個人的興味関心により「日本に行って日本人の友だちやホストファミリーと話したいテーマ」を自由に選択。スピーチをすること自体の勉強、また自分の関心のある分野での語彙を強化する狙いがある。
- 2) ビデオ教材を用いた日常生活の疑似体験
『ビデオ講座日本語 新・日常生活に見る日本の文化』2004年（東京書籍）を教材とし、日本の日常生活風景を疑似体験すると同時に、具体的場面に即した日本語を聞き、理解する。日本語の場面と対人関係による使い分けを意識化する。これに関しては2008/09年冬学期の授業から『エリンが挑戦！ にほんごできます。』2007年（国際交流基金）を使用している。
- 3) 地域方言にふれる
学生からの要望もあった為、学期最後の二回の授業を使って関西弁を学習するようにしている。その際、関西方面大学からの「関西弁ネイティブ」の日本人留学生に協力してもらっている。関西弁を授業で扱う目的は、もちろん関西弁ができるようになることではなく、「まったく知らない」方言を「聞いたことがある」方言へ変えることにある。つまり、留学の心理的負担を軽減すると同時に、方言への興味を高めることにあると言える。教材は『聞いておぼえる関西（大阪）弁入門』1998年（アルク）を使用している。関西弁の授業は、2007/08年冬学期以降実施しているが、毎回学生の反応はポジティブである。
- 4) 常体の会話の練習
常体の会話について、その特徴について学ぶ。教材は『なめらか日本語会話』1997年（アルク）『マンガで学ぶ日本語会話術』2006年（アルク）を部分的に使用している。
- 5) 自分の大学町について知っておく（学期末会話試験）
留学してまず聞かれること、話題にのぼることの一つにチュービンゲンの町がある。自分の母校がある町について話すことができるよう、試験のテーマはチュービンゲンの観光案内にしている。学生の中にはチュービンゲン周辺の都市から通っている学生も少なくなく、この機会を通して改めてチュービンゲンについて学ぶ学生もいる。

2.2 異文化・日本事情に関する留学前のサポート（非語学教員による授業）

留学前学期には、「異文化間コミュニケーション」と「京都を歩く」と題される授業が実施され、前者は京都留学のみを念頭においた授業ではないが、実質的に留学をサポートする役割を担っている。

「異文化間コミュニケーション」の授業では、日独の比較を多く取り入れながら、文化による言語行動の違いや異文化間コミュニケーションの分野での重要な概念を扱い、ドイツ語で行われる。以下に2007/08年冬学期の授業計画を示す。

「異文化間コミュニケーション」2007/08年冬学期授業計画

1. 導入
2. 文化とコミュニケーション
(高コンテクスト文化 vs. 低コンテクスト文化)
3. 文化を記述するモジュール
4. 個人主義 vs. 集団主義
5. ステレオタイプとエチケット
6. ノンバーバル・コミュニケーション導入、ジェスチャー
7. 時間と空間
8. 言語による誤解
9. 沈黙とあいづち
10. 挨拶
11. 依頼、招待、断り
12. 謝る
13. 直接的コミュニケーション vs. 間接的コミュニケーション
14. 「カルチャーショック」は存在するのか。
15. 試験

もう一つの授業「京都を歩く」は冬学期は時間割の調整がつかないことが多く、たいてい学期末、または学期休み開始直後に1-2日間の特別授業により実施されている。チュービンゲン大学日本学科ホームページに開設されている京都留学のページを基に、非常に具体的で実践的な情報が、京都に留学滞在経験のある講師により紹介される。学生たちは事前に代表者を決め、京都市内地図、関西情報等の資料をフランクフルトにある独立行政法人国際観光振興機構事務所⁹より人数分取り寄せる。授業では、それをもとに同志社大学の場所を確認したり、路線図上で重要な駅にチェックを入れながら留学前の実質的準備に取りかかる。

9 <http://www.jnto.de>.

2.3 京都との連絡

京都の授業は、チュービンゲンでの日本語教育を引き継ぎ、発展させるものでなければならない。一方、ドイツの学生は日本到着時に運用能力が低く、日本語能力全体が低く見られがちで、京都の授業は復習から始まる。それは必要なことであるが、意欲をもって留学に臨んだ学生を落胆させることがある。学生の意欲がそがれることなく、ちょうどよく先に進ませていくためにも、京都との綿密な連絡は必須である。

それで、チュービンゲンの教員から語学コースの授業内容別に、留学前の学期に何をし、どんな成果が得られ、何が問題だったかを連絡している。また、試験問題や学生の解答例、学生の成績、グループ分けの提案リストも送っている。また、京都での学期が終わった時点では、京都の授業についての詳しい情報がチュービンゲンに送られ、チュービンゲンでの5学期目の授業の参考にされる。

ところで、京都との連絡は、2006/07年度からの留学の必修化に伴い、単なる日本人教師同士の授業連絡以上のものとなった。それまであまり自覚されなかったことだが、ドイツ（の大学）で日本語を教えるのは、ドイツの学習文化の脈絡の中で教えているのであり、日本で日本の学習文化の伝統にのっとって教えるのとは違うものなのである。この違いは思いがけず大きかった。例えば、日本では出席も成績の一部になるが、ドイツではそれは試験を受けるための前提でしかないこと、日本では試験に授業で扱ったテキストから問題が出されるが、ドイツでは未知のテキストを使うこと、さらに、卒業成績に関係する試験となると、ドイツの学生は些細な点にまで神経をとがらし点数にこだわること。連絡し合う中でこのような違いが浮上し、その度に意見交換が行われ、背景にあるドイツの学校制度を説明することによってはじめて日本側の納得が得られたりした。この意思疎通は、異なる学習文化の接点をさぐるものでもある¹⁰。

3 アンケートによる留学実態調査

2007/08年冬学期に4学期終了後京都に留学した学生22名（当時のBA課程とマギスター課程の学生）を対象に、京都

10 この意思疎通のために、チュービンゲン大学ではWS 09/10に京都の日本語教師を招き、授業見学と意見交換の機会を持った。

留学の日本語学習の実態を知るため、また留学前後の語学授業との連携をよりよいものにする目的で、アンケートを実施した（調査票とその結果は資料を参考）。実施時期は留学終了間近の2008年1月末～2月中旬で、調査票を各学生にメールで送り、匿名にしたい者については同志社センターの事務室に紙で提出してもらった。尚、回答率は59%（13人）。調査項目は大きく5つに分かれ、①留学開始時の日本語能力と②自己分析によるその理由、③留学中の日本語学習状況、そして①と比較しての④留学終了時の日本語能力、最後に⑤準備で不足だった点と今後についてである。①と④の日本語能力は学生の自己評価による。以下にその結果をまとめ、報告したい。

1-1～1-4 まず日本語能力の評価であるが、予想通りほとんどの学生が2段階ほど「上達した」と回答した。しかし、中には「（携帯）電話で話す」（4人）、「（携帯）電話での話を聞いて」「買い物などに行って、知らない人と話す」「新聞を読んで」（各3人）など留学開始時と終了時では自己評価が変わらない学生もいた。また、全言語能力自己評価について「下がった」と評価した学生が1名いた。

2-1 留学開始時、日本語を聞いてわからなかった理由は、「b. 語彙力」と「e. 話すスピード」が一番多く、「a. 文法表現をしらなかった」は少なかった。

2-2 また、留学開始時、自分の日本語が日本人に理解してもらえなかった理由では、13名中10名が「h. 文法間違い」をあげており、「f. 発音」と「g. アクセント・イントネーション」を挙げた者はどちらも2名しかいなかった。

3-1 留学中の言語生活については、家または授業で日本語を使う機会が多いと答えた学生が多く、その中でも「家で」一番よく日本語を話すと答えた学生が4分の3を占め、「どんな人とよく日本語を話すか」という問いに関しても「ホストファミリーのお母さん」または「ホストファミリー」という答えが最も多かった。自由時間の日本語使用状況にはばらつきがあった。

3-2 「日本人とのコミュニケーションでうまくいかなかったこと」と「その理由」については、ほぼ全員が文化的問題ではなく、言語的問題に理由を見出しているのは興味深い。

3-3 日本語上達のための努力では、「できるだけたくさん日本語で話した」（10人）、「本や雑誌、新聞をよく読んだ」（9人）、「テレビをよく見た」（9人）、「漢字を勉強

した」(8人)、「タンデムパートナーを作った」(5人)となっている。

4-1 留学終了時の日本語能力で問題だと思うことについて四技能別に聞いたところ、「話す」「聞く」では語彙力を挙げた学生が多く、「書く」「読む」では漢字力を挙げた学生が多かった。語彙力と漢字力の不足を自覚できたことも留学の成果の一つと言えよう。また、「書く」に関しては「手で書く機会がないこと」を問題視している意見もあり、今後の授業に(手で)書かせる機会を設ける必要性を感じた。

2-3 「留学前に授業でやってほしかったこと」の多くは、常体での会話に集中していた。アンケート対象の学生は、文法と長文読解能力養成に重点を置いた授業の世代最後の学年にあたり、今までの授業で学んだ日本語と日常会話の日本語との乖離がこのような学生側の意見につながったとみることができるかもしれない。

4 留学の仕上げ

4.1 報告会 — 情報交換

京都留学の次の学期初めに、帰ってきた学生たちと教授・教員とで、留学の報告会が持たれる。学生たちはここで、授業・ホームステイ・余暇活動・費用などすべてにわたって、評価される点と改善されるべき点について、忌憚なくドイツ語で意見を言う機会をもつ。留学の不満や問題が解決されていない場合は、ここで話すことは大切だ。職員側にはセンターのかつての所長を務めた者もいるので、その問題に別の見方を提示することもできる。そして、時間と距離において留学を見返すことで、自然に解決する問題もある。また、学生の体験・意見は教員側にとってもセンター運営のフィードバックとして貴重なものである。

4.2 スピーチ — 留学の仕上げ

留学後の学期に行われる会話授業で、その一部の課題として「日本留学を振り返って — 異文化体験を考える」という5分程度のスピーチを課す。このようなテーマは、単なる日本体験、または、母国文化との差を述べるだけになりがちであるが、このスピーチの課題は体験話ではなく、それに関する自分の意見ないし違いの分析を述べることにある。さまざまな留学の成果(上記 1-3 で目的を述べた)を、日本語学習の

成果（中級レベル）を持って言葉にしてみるのが、そのねらいである。内容的にはこのようなまとめはドイツ語で異文化間コミュニケーション関連のゼミナールでやるのがふさわしいかもしれないが、そういうものがもう BA 卒業までにはないので、日本語の授業に組み込んでいる。

内容的には、体験話のレベルを超えて解釈や分析のレベルにまで入ることは、語学の問題とは無関係に難しいようだ。よって、スピーチ本番前に一度教師が原稿に目を通す際に、この点が足りず、学生にもう一度考えさせることがよくある。しかし、これまでもいろいろおもしろい考察が試みられた。例えば、自分で店員としてドイツでインターンシップを経験したことがある学生は、日独の店員のサービスがなぜこんなにも違うのか、その原因について考え、また、日本でよくほめられることを意外に思った学生は「ほめること」の文化的考察をし、また、経済に関心のある学生は、ハイテク技術の高い両国でその技術の使われる領域がどう違い、それはなぜかを考えた。あるいは、留学前の日本への憧れから、留学中の母国ドイツの再評価を通して、今、両方の国に新たな関心を持つに至った経緯を話す学生もいた。

スピーチという人前で（日本語で）話す課題は、初級から行っているものだが、BA 課程の最後の会話の授業では、できるだけメモを見ないで自由に話すことが要求される。これが実際にできているのは全体の半分ぐらいであるが、それでも長い目で見ると、学習者に進歩を見てとることができる。

4.3 自己研鑽への励まし

学生は留学中に語彙力、とくに漢字の知識が足りないと痛切に感じるようだ。その切実さから一年生の漢字の指導をかって出た者もいるほどだ。漢字・語彙の勉強は忍耐が必要だから、これは大切な認識である。留学後は日本語の授業は BA 卒業までにニコマしかないので、留学中に得た日本語力を落とさず逆に高めるには、自己研鑽していくしかない。それを教師はたえずアピールしていく必要がある。

各自が語学を研鑽する上で、日本語能力試験は一つの具体的な目標になる。夏に留学から帰ってきた学生が 12 月の試験で二級（N2）合格を目指すなら、それはちょうど適当な挑戦だろう。だから、それへの挑戦を勧め、学生が自主的に個人や仲間と勉強したりするように、指導している。

5 今後の課題

以上に述べてきたように、京都留学はチュービンゲン大学日本学主専攻 BA 課程の核となっているが、この課程自体が大学制度の中でよく変わるので、留学に関しても常に新しい課題が出る。2010/11 年度からの新修正 BA で入学してきた学生は、2011/12 年度に三学期目と四学期目で半々ずつ（希望により一部学生は通年）留学する。そのため、チュービンゲンと京都では平行して授業をし、同じ単位を出さなければならない。このためには、双方であまり落差のないような試験をする必要がある。これは、授業環境からいっても、2.3 で述べたような学習文化背景から言っても、容易なことではない。この点を具体的に解決していくことが当面の課題である。

長期的な課題は、留学をより効果的にするためにもっと工夫をしていくことである。語学ばかりでなくゼミナールなどでも、留学を射程に入れた企画がこれまでも行われたが、インターネットを利用したビデオ通話でコミュニケーションできる時代にいるのであるから、今後はこの二つの拠点を同時に持つことをもっと生かす方向で努力していきたい。

【資料 - 調査票とアンケートの結果】

アンケートの自由回答の部分については、訂正を入れず学生が記入した通りに、その言語で記した。

Seminar für Japanologie, Universität Tübingen テュービンゲン大学日本文化研究所
2008-01-29 小山・濱田

日本の勉強と留学に関するアンケート

(答えは日本語で書いてもドイツ語で書いてもいいです。) 性別 (男・女)

1 あなたの日本語能力はどう変わりましたか。

自分の日本語能力について、1-5 の番号を に書いてください。

左の は日本に着いた時 (10 月中旬くらいまで)、右の には今の自分の能力について書いてください。

(1: よくできる、2: だいたいできる、3: 半分くらいできる、4: ほとんどできない、5: 全然できない)

1-1 日本語を聞いて、どのくらい分かりましたか。／分かりますか。

	留学開始時					留学終了時					
	評価 1-5	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5
a. ホストファミリーの会話を聞いて	0	1	2	10	0	4	7	1	0	1	
b. 学生や友だちの話を聞いて	1	0	6	6	0	2	10	0	0	1	
c. 日本人の先生の授業を聞いて	1	5	4	3	0	8	3	0	0	1	
d. テレビを見たり、ラジオを聞いて	0	1	1	7	4	1	6	5	1	0	
e. 買物などに行き、知らない人の話を聞いて	0	1	5	5	2	4	6	2	1	0	
f. (携帯) 電話での話を聞いて	0	2	5	5	0	1	6	4	0	1	

1-2 日本語でどのくらい話せましたか。／話せますか。

	評価 1-5									
	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5
g. ホストファミリーと話す	0	1	7	5	0	3	7	2	1	0
h. 学生や友だちと話す	0	1	3	9	0	3	6	1	2	1
i. 買い物などに行き、知らない人と話す	0	1	7	5	0	2	7	3	1	0
j. (携帯) 電話で話す	0	0	5	4	2	0	5	2	3	1

1-3 日本語を読んでどのくらい分かりましたか。／分かりますか。

	評価 1-5									
	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5
k. 町を歩いて (広告や店名の漢字のなど)	0	1	6	4	2	2	7	3	1	0
l. 新聞を読んで	0	1	2	7	2	0	2	9	2	0
m. インターネットで日本語のサイトを読んで	0	2	4	6	1	1	8	3	1	0

1-4 日本語でどのくらい書けましたか。／書けますか。

	評価 1-5									
	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5
n. メールを日本語で書く	0	1	7	4	1	3	6	3	1	0

以上の a. -n. を集計すると以下の通りになる。

	ㄗ	ㄗㄗ	ㄗㄗㄗ	⇒	ㄣ
a	3	9	0	0	1
b	5	6	0	1	1
c	6	5	0	1	1
d	4	6	2	0	1
e	3	8	1	0	1
f	5	3	0	3	1
g	5	6	0	1	1
h	3	7	0	2	1
i	5	4	0	3	1
j	4	0	2	4	1
k	7	4	1	0	1
l	7	1	0	3	1
m	7	3	1	1	1
n	4	5	1	2	1

ㄗ: 1レベルアップ

ㄗㄗ: 2レベルアップ

ㄗㄗㄗ: 3レベルアップ

⇒: 変化なし

ㄣ: 1レベルダウン

2 着いた時の日本語能力について

2-1 日本に着いた時、日本語を聞いて今より分からなかったのは、どんな理由からだと思いますか。あなたが思う理由には (○)、思わないものには (×) を書いてください。

	○	×
a. 文法表現を知らなかった	5	8
b. 語彙力 (Wortschatz) がなかった	11	2
c. 方言が分からなかった	8	5
d. ふつう体 (in vertrauter Form) の会話、若者言葉を知らなかった	8	5
e. 話すスピードが速かった	10	3

その他

- ・ホストファミリーのお父さんは英語と日本語を一緒くたにするし発音はわかりにくいでした。
- ・自分の気持ちを伝えない／ニュアンス分らない

2-2 日本に着いた時、あなたが話して日本人に分かってもらえなかった理由は何だったと思いますか。あなたが思う理由には (○)、思わないものには (×) を書いてください。

f. あなたの発音	2	11
g. あなたのアクセント・イントネーション	2	7
h. あなたの文法の間違い	10	3
i. 相手の日本人が外国人の日本語に慣れていなかった	5	8

その他

- ・正しい表現を使わなかったから
- ・語彙がすくないから

2-3 留学前に授業でやってほしかったことは何ですか。自由に書いてください。

- ・ドイツの授業で話し言葉を勉強することは十分ではありませんとおもいます。
- ・Ich hatte keine besonderen Erwartungen.
- ・日本に着いてから、話し言葉をぜんぜん分からなかったから (ドイツであまり教えてくれなかったので)、授業でもっと話し言葉を勉強した方がいいと思います。
- ・普通体の会話の表現とか文法とか
- ・日常の言葉を勉強した方がよかったと思います。(私は「黄熱病」について話せましたが、自分で駅で道を見つけることができませんでした。) お後は、ちょっと関西弁の勉強も必要だと思います。
- ・読解の授業には、自分で声を出して読みたかったんです。
- ・若者の日本語を分かるようになるため、映画とかアニメを見る方がいい。

会話でよく使う言葉の勉強ももっとしたかったです。

- 例えば、「クレームの時はいつもこの表現を使っている」というような表現。日本に来て、文法も語彙も知ったけど、どのときどれを使ったらいいか分からなかった。
- 会話の授業で丁寧語を使わないで話すのを勉強をして欲しかった。こういうのをちょっと勉強したけれども、十分ではなかったと思う。
- 関西弁について話せば、よかったですと思います。そして、日本に行く前に日本に行ったことがある学生たちと話し合ったら、よかったです。
- 真正なテキスト（新聞の記事など）、漢字をまだ習っていないものを、漢字を調べながら読んで欲しかった。
- 自由に／自発的に小さなスピーチなどをする練習をして欲しかった。
- 店人の言葉（店内でめしあがりますか など）
- 関西弁について

3 滞在中の言語生活について

3-1 日本でどのくらい日本語を話しますか。1-3 の数字を に書いてください。

	頻度	1	2	3
a. 家で		8	1	4
b. 授業で		8	3	2
c. 自由時間		4	5	4

- 1: よく話す
- 2: 半分くらい話す
- 3: 少しだけ

a.-c.の中で、一番日本語をよく話すのはどこですか。

a. 家で	8
b. 授業で	5
c. 自由時間	2

どんな人とよく日本語を話しますか。（例：ホストファミリーのお母さん）

誰と	人数
ホストファミリーのお母さん	5
ホストファミリー	7
先生	4
友だち	5
タンデムパートナー	1
知らない人	1

3-2 日本人とのコミュニケーションでどんな時にうまくいきませんでしたか。

- 来日
- Komplizierte Themen (wie etwa ein Gespräch über ein Buch über Einstein) sind etwas schwer.
- 複雑なテーマについて話した時に専門言葉とか表現がなかったから困っていた。
- 買い物をすると店員さんが小さい声で早く話す時。
- 知らない日本人とイライラする人と話すときに緊張したからうまくいきませんでした。
- 相手がおじいさん・おばあさんだった時. . .
- 例えば、知らない日本人と丁寧語を使って話し掛けたら、日本人はたいいてい分からなかった。
- 相手をあまり知らない時、話すのははずかしいから、緊張します。
- 複雑か難しいや特別な言葉が必要だった時 (政治、動物園、医学、電器製品)

その理由は何だと思いますか。

言葉の問題

- 歴史、政治、社会的な言葉があまり知らない
- 日常生活にとって適当な言葉を知らなかった。
- 言葉が分からなくて説明するのも難しかった時

文化的な問題

- 間違ったから文の意味違いました

3-3 日本語が上手になるようにどんな努力をしましたか。

やったものには (○)、やらなかったものには (×) を書いてください。

	○	×
a. できるだけたくさん日本語で話した。	10	3
b. 本や雑誌、新聞をよく読んだ。	9	4
c. 漢字を勉強した。	8	5
d. テレビをよく見た。	9	4
e. タンデムパートナーを作った。	5	8

その他

- 日本語で手紙を書いた
- 暇な時日本人と遊びに行ってみた
- 知らない言葉があったら、メモを書きました。
- 周りの日本人の話を聞たりできるだけたくさんの人と色々なシチュエーションに話したりしました

4 今と今後について

4-1 今の自分の日本語能力で、何が問題だと思いますか。話す・聞く・書く・読むについて書いてください。（項目後の数字は頻度を示す）

話す	語彙 6 日本語を話す自信 文法 2 発音 流暢さ
聞く	知らない表現と言葉 4 話すスピード 3 会話体 方言 4 発音 2 聞く機会 若者言葉 1 敬語 1
書く	適当な表現と文法 3 漢字 6 書く機会 3
読む	漢字 9 語彙 1

4-24-1 で答えた足りない力について、留学が終わってから何をしようと思いますか。また、何が役に立つと思いますか。自由に書いてください。

- ・ 先生がたくさん読むのは一番大切だと言ってくれました。
- ・ Ich möchte versuchen, mehr japanische Filme zu sehen und japanische Bücher zu lesen, um mein Hörverständnis und meine Kanji-Kenntnisse zu verbessern.
- ・ たくさん本を読みたいし、文法を繰り返したいと思います。
- ・ 本、専門書を読む、タンデムを作る
- ・ 漢字一所懸命に勉強したいです
- ・ タンデムを探すことや 読む、読む、読む
- ・ もっと日本語を勉強したいですし、日本人の友達もたくさん作りたいです。
- ・ 新聞を読めるようになったらいいと思います。
- ・ 日本語能力試験を受けようと思っている。そうすると、勉強が続けて、日本語を忘れないようにする。
- ・ 日本人の友達とたくさんメールを書こうと思う。
- ・ 自分で漢字を復習したいです。
- ・ もっと漢字の勉強をするつもりだ。
- ・ もっと日本語の本を読みたいと思う。
- ・ たくさんの手紙を書く
- ・ もうちょっと頑張らなければなりません。漢字や言葉を勉強したり大学の授業へ行ったりするつもりです。

- 5 生活の中で、言葉の問題だけではなく、何か困った事がありましたか。自由に書いてください。
- 習慣に慣れることは難しかったです
 - Es gab kein echtes Brot und keine echte Wurst. ... Ansonsten war alles in Ordnung.
 - 日本人の家生活の習慣についてあまり知らなかったです。
 - とても一般的な会話の文法表現が知らなかった
 - 家の中では本当に寒かったです！
 - 時々知らなかったエチケットは困りました。
 - 特にありませんでした。
 - 私ではなくてけれども他の留学生のホストファミリーは厳しくて、みんなはドイツでは自分で住んでいたから、夜に帰る時間とかについて問題があったかもしれません。
 - ホストファミリーはウザイところがあったが、直接にやめてくれといっちゃいけないから、我慢したことも多かった。そして、寒かった！！（家の中で）。テュービンゲンでは忠告されなかったから、ちょっと困った。そして、相手は私の外国人が日本語ができると絶対に信じたがらなくて、しょっちゅう日本人の友達とかと話し続けていたということもあった。
 - 外国人だったら、困ったことがたくさんあると思う。例えば、地下鉄の定期券を買う時に、毎月困ったことがあった。
 - 電車の定期券を買うことが私たちの外国人にとって、難しくなったと思います。
- 6 留学してよかったと思うのは、どんな点ですか。自由に書いてください。
- 日本の生活に慣れるしたくさん日本語の勉強をすることができます。
 - Meine mündliche Ausdrucksfähigkeit hat sich deutlich verbessert. Das Leben in der Gastfamilie hilft wirklich, sich zu trauen und einfach zu reden. Die Lehrer haben uns auch sehr motiviert und unterstützt.
 - いっぱい新しくていい経験しました。
 - 面白い経験をたくさんしたし今から日本語でのコミュニケーションが出来る
 - たくさんの良い経験をしました。その時に日本の文化と語からたくさん勉強して向上しました。
 - 全部です。もちろん、今は言葉よく分かるようになりましたが、留学の後では日本がよく分かります。
 - やっぱり少し成長できたかなと思いますし、将来には絶対日本に住みたいという夢がかなり強くなってきました。
 - 日本の家族と一緒に住むことが出来たから良かったと思います。その上、日本の友達をできました。
 - 日本について以外も、自分自身とか自国とかについてもたくさん覚えられて、よかったと思う。そして、今の日本に対するイメージは以前より現実的・即物的だとも思う。
 - 毎日日本語を聞く点だと思う。ドイツでこういう機会がない。
 - 日本語を話すことに慣れました。今、恥ずかしいという気持ちがなくなりました。日本人の日常生活を直接に体験して、よかったです。
 - 日本の文化と日常生活を分かるようになって来た。
 - 日本語を話さないといけなかった。
 - 友達をつけたり、自分の日本語のレベルを上がったたりしたのはよかったと思います。